

♣ Good Loser ♣

「勝負」「勝敗」と言うように、戦えば勝つこともあれば負けることもある。残酷だ。たった1点違いであっても、相手のミスで転がり込んできたものでも、勝ちも勝ちであり、その逆は「負け」。女子バレーボール部を率いていた頃、神がかり的な力を発揮して勝ってくれたことも、懸けていた試合に敗れ誰にも会いたくないほど落ち込んだこともあった。勝ったときには敗者の心の痛みを気遣い、負けたときは悔しさをかみ殺して潔く勝者を讃える心を持つ・・・そんな心の鍛錬を要する「勝負の世界」から学べることはとてつもなく大きい。

「勝ちに不思議の勝ちあり 負けの不思議の負けなし」と言う。平戸藩の9代藩主、松浦静山（まつらせいざん）の書いた剣術書「剣談（けんたん）」の中にある言葉だそうだ。確かに、これまでのどの試合をふり返っても、勝ったときは「ん？なんで勝てたのかな？」と思うことはあったが、負けたときに敗因の見つからないものはただの一回もなかった。つまり「勝ち」は捨てることはあっても、理由なく負けることはない。ただ、残念ながら「疑惑の判定」や「ホーム・アウェー」でレフェリーのジャッジに涙をのむ場合もある。今はタレントとして活躍中の篠原信一が、2000年シドニーオリンピック 柔道男子100Kg超級決勝において「世紀の大誤審」で銀メダルとなった試合などはまさしくそうであった。当時の映像が今も残るが、篠原が相手の技を見事に返した後、相手も監督も自らの負けを悟ったかのような雰囲気であったが、無情にも審判団は相手選手にポイントを与えるという真逆の判定をした。その後、篠原はポイントを奪い返せず相手選手の金メダルが確定した。後に国際柔道連盟も「誤審」であったことを認め、不運で片付けるにはあまりに残酷な敗戦であったと言える。

しかし・・・当の篠原選手は当時、誤審については一切語らず「自分が弱いから負けた。それだけです。」としその後も「審判の判定など一切関係なく、ポイントを奪い返せなかった自分の弱さが敗因である。」と判定に一言の恨み言も言わなかった。人間の本性、強さというものは逆境に立たされたときにこそ試されるもので、篠原氏は真の「Good Loser」と言えよう。

アメリカ大統領選挙・・・バイデン氏が勝者となり各国から祝意や今後の連携などを進める動きが広がっている。一方で敗れたトランプ氏は、選挙結果をまさしく「誤審」であると断じ、法廷闘争に持ち込む勢いを見せるなど、泥沼の様相を呈している。地球上にはアメリカの混乱をほくそ笑んでいるのではないかと思われる国もあり、大国の空白はそう長くは許されない。トランプ氏には民主主義の根幹である選挙結果を真摯に受け止め、勝者と、自身を支えてくれた国民を讃えるメッセージとともに「敗北を宣言」し、「Good Loser」となることをおすすめしたい。



篠原選手は自分が勝ったと信じ、審判の判定を確認。相手選手（デュイエ）は負けたとうなだれるシーン。